一九二〇年代における「日本精神」

――安岡正篤・和辻哲郎・大川周明・平泉澄の比較――

水野雄司

はじめに

1.「日本精神」とは

昭和戦前期から戦中にかけて流行した語に「日本精神」がある。田中康二の調査によれば、一九三一年の満洲事変以後、「日本精神」に関する文献は増加し、一九三三年には著書・論文ともに刊行数が飛躍的に増大した(1)。一九三四年五月の『思想』では「日本精神」に関する特集が組まれ、巻頭論文「日本精神について」を寄せた津田左右吉は、次のように述べている。

「日本精神」という語が何時から世に現われたのか、確かには知らぬが、それがひどく流行したのは最近のことのようであり、いわゆる「非常時」の声に伴って急激に弘まったものらしく思われる(2)。

戦争の気配を帯びつつある「非常時」のなかで、「日本精神」は「流行」していった。この語は、単に日本の特色を穏やかに言い表すものではなく、国家と国民の結合を支える言葉として機能した。自由主義や社会主義を

外来思想として排撃し、国家への忠誠を形成するうえで、大きな役割を担うようになった。津田は同じ論文で、この語に「一種の重苦しい抑圧的のひびき」さえ感じると記し、また和辻哲郎も、昭和九年に発表した論考において、「日本精神といふ言葉は右翼的、反動的、保守的といふやうな標識を持つたもの」[3]と述べている。

実際に、この「日本精神」の普及は、時の政府によって進められた。そこで重要な役割を担ったのが、国民精神文化研究所と文部省思想局である。国民精神文化研究所は、一九三二年に文部省の研究・研修機関として設立され、毎年、師範学校・中学校・高等女学校などの教員を研究員として受け入れ、再研修を通じて精神文化への理解を深めさせ、それを全国の学校教育に反映させる役割を担っていた。これに対して思想局は、文部省内部において思想問題の調査と思想指導を担当した部局である。その活動は、「日本精神」をいかに整理し標準化するかにあり、その成果として、一九三五年の『日本精神論の調査』[4]が作成された。急速に広がった「日本精神」をめぐる言説を、行政の側から調査・整理した資料である。

本書は前篇と後篇から成り、前篇は日本精神論そのものを整理し、その主要な型を示す総論にあたる。序では、「日本精神」という語の流行そのものを説明するところから始まっている。そこでは、この語が標語として力強さと新鮮さを帯びて広く伝播したのは、昭和六年秋の満洲事変以後であるとされる。また、内容の上では「大和魂」「やまとごころ」「国民精神」「皇国精神」「神ながらの道」などと著しく異なるわけではないが、それらに比べて「日本精神」という語がとくに好んで用いられ、魅力をもって流布したと述べられる。

続く章では、日本精神論が三つに類型化されている。第一は「革新的日本精神論」であり、左翼思想・運動への対抗のなかから生じ、国家の諸機構を徹底的に改造することを主眼とする立場である。そこでは、明治以来の西欧模倣、資本主義、政党政治による腐敗が問題とされ、日本精神はその打破と国家改造の原理として理解され

る。第二は「理論的日本精神論」であり、明治以来の欧米思想や文物の流入のなかで見失われた日本の精神の本質・特性・淵源を理論的に究明しようとする立場である。第三は「実践的日本精神論」であり、前二者のあいだに立って、急進的改造や抽象的観念への偏りを退け、日本人としての日々の生活のうちに日本精神を実践的に体得し、各自がその立場に応じて本務を果たすことを重視する立場として説明される。

前篇の結語は、満洲事変以後の諸情勢が「日本精神へ還れ」との叫びを高めたことを認めつつ、世に現れた多くの日本精神論には発生の縁を異にするものがあり、純雑深浅の入り混じる状況にある。そのうえで、現下の急務として、一方では深い体験に基づく理論的闡明を、他方では国民各自がその境遇と立場に応じて本務に生きることを述べている。

前篇が総論として日本精神論の類型を示すのに対し、後篇は、「日本精神」に言及した五四名を対象に、それぞれの著作や論文を掲げつつ、その所説の要点を摘記する構成をとっている。論者ごとに異なる「日本精神」が提示されており、全体として、日本精神論を一覧化した調査資料として読むことができる。

2. 本稿の目的

このように、一九三〇年代以降に急速な広がりを見せた「日本精神」であるが、満洲事変以前の一九二〇年代においても、すでに用いられていた。それは「精神」という語が、哲学・思想の文脈において一定の重みを帯びていたため、「大和魂」のような旧来の表現に比して、より新しい語として、大正デモクラシーを経た知識人層にも受容されやすかったと考えられる。

そして本稿では、この一九二〇年代の「日本精神」を検証することを目的とする。具体的には、「日本精神」

と冠した最初期の著作である安岡正篤『日本精神の研究』（一九二四年）[5]、続く和辻哲郎『日本精神史研究』（一九二六年）、大川周明『日本精神研究』（一九二七年）、平泉澄「日本精神発展の段階」（一九二八年）の四つの論考を対象とする。この時期においては、「日本精神」は、のちのように国家的標語として一義的に定着していたわけではなく、それぞれ異なる文脈と含意のもとで用いられていた。言い換えれば、本稿が対象とするのは、後年に整理・標準化される以前の、多義的かつ多様な相貌を示していた段階の「日本精神」である。

もっとも、先行研究において[6]、各人物が何を「日本精神」として捉えていたのかについては、一定の検討が積み重ねられている[7]。これに対して本稿では、まず対象時期を一九二〇年代に限定したうえで、さらに「敵」という視角を提示する。ここでいう「敵」とは、狭義の政治的敵対者を意味するものではなく、各人物の議論において個別に危機として立ち現れる諸事象を束ね、その思索の背後において根本的危機として把握されているものを指す。本稿では、各人物が何を「日本精神」として提示しているか以上に、何を中心的な「敵」と見定めているのかを明らかにする。というのも、それぞれの「日本精神」は、まさにその「敵」に対する対抗原理として要請されたからである。この観点から検討を行うことによって、一九二〇年代において何が脅威として感知され、いかなる自己のあり方が求められていたのか、その歴史的性格の一端を照らし出すことが可能になると考える。

第一章　安岡正篤『日本精神の研究』（玄黄社、一九二四年）

1．歩み

安岡正篤（一八九八～一九八三）は[8]、大阪府大阪市に生まれ、東京帝国大学法学部政治学科を卒業した思想家・